

2 「ポエム絵画展」の軌跡

「茶山ポエム絵画展」が始まって30回。また、主催団体が菅茶山顕彰会から公益財団法人かなべ文化振興会と菅茶山記念館へと継承されて10回目を迎える。

菅茶山記念館からの提供資料や菅茶山顕彰会会報、HP菅茶山新報などを参考資料として、来し方30年の歩みを辿ってみた。

毎年の絵画展は、次のような1年半サイクルで展開する。

7月：ポエム絵画の募集

12月：作品審査

翌年1月：授賞式と菅茶山記念館展

5月～12月：優秀作品展示会（移動展）

(1) はじまり

茶山ポエム絵画展の淵源は、平成4年発刊の『まんが物語 神辺の歴史』（シナリオ構成：中山善照 発行：神辺を元気にする会三宅真一郎）に遡る。中山氏は備後輩出の数多の文学者の源流を（*）菅茶山ととらえ、その源流を未来につなげたいとの強い思いから、同書第8章「菅茶山」で茶山詩を子ども達にわかるように現代語に訳した。



（*）「茶山、葛原勾当、福原麟太郎、井伏鱒二、木下夕爾と続く系列である。さらに、その孫の葛原しげるとその友人の宮城道雄というふうになっている。」（郷土の文人達 松岡幾雄 会報第6号）

翌平成5年、これをヒントに、「茶山詩をさらに多くの人に、殊に小中高校生徒にふれ親んでもらうために、茶山先生の詩をイメージした絵を描いてもらって、展覧会をしよう」という考えから、菅茶山先生遺芳顕彰会と地元有志が前年開館したばかりの菅茶山記念館と諮り、神辺町教育委員会の後援を得て、実行委員会を組織して、第1回絵画展を企画した。

まず、中山氏に児童生徒や一般向きの茶山詩8首を選んで現代語訳していただき、「茶山ポエムの絵を描こう」要項（5,000部）を夏休み前、町内小中高校の先生・児童生徒並びに福山市域の高校生に配布し、9月末を応募締め切りとした。

その前宣伝として、8月には神辺公民館で、茶山詩の朗読をベースとしたトークやタップ、和太鼓をミックスしたアトラクション「茶山ポエム イマジネーション・パーティ」が華やかに開催された。マスコミの報道が巷間の話題を呼び、予想以上の宣伝効果をもたらした。

(2) 創成20年間の軌跡

☆1993（平成5）年度 第1回 {応募点数 637点}

待望の第1回の応募作品は地域の小中高校生から637点。予想を超える収穫であった。8首の詩題（現代語訳）で、最多は「螢」235点、次いで「蝶」「夏の思い出」「花吹雪」「花と和尚さん」「山と夏雲」だった。

審査委員長は縄稚輝雄先生（日展会友 誠信幼稚園園長）。厳正な審査の結果、最優秀賞3点、優秀賞21点、入賞35点、佳作30点が選ばれ、いずれの作品も予想を超えた素晴らしい作品だった。同年11月菅茶山記念館で全作品を展示し、



434名の入館者が記録されている。続いて、ふくやま美術館の廊下展示場に約20点が初公開された。

☆1994（平成6）年度 第2回 {1,672点}

10首の詩題で募集したところ、前回の約3倍の応募があり、作品詩題は「螢」「蝶の夢」「梅」が圧倒的に多かった。後日、実行委員や審査員、参加校の代表者による反省会を開いて意見交換した。

☆1995（平成7）年度 第3回 {2,316点}

作品が秀れていることが認められ、第3回ふくやま美術館展からは美術館共催となり、優秀作品約40点がギャラリーに展示され、2,900人の入館者が記録されている。

☆1996（平成8）年度 第4回 {2,828点}

絵画展実行委員会 岩川千年氏の報告によれば、神辺町立中条小学校でのポエム絵画指導の実践記録が美術教育専門誌『教育美術』に掲載されるなど、地元教育現場でも大きく取り上げられ、町内の医院・歯科医院、ぬまくま町民会館・三和町公民館などでの移動展が開催された。

☆1997（平成9）年度 第5回 {2,752点}

☆1998（平成10）年度 第6回 {2,683点}

菅茶山生誕250年祭の行われた10月17・18日、新企画「かなべ町並格子戸展」が始まった。十日市、三日市、七日市通りの40軒の格子戸のある民家から快く協力を得た。

第5回入選作品86点の絵画の傍らに、高橋孝一会長手造りの竹筒に、家族が用意された楚々とした草花が活けられ、文字どおり、展示作品に華を添え、今に受け継がれるようになった。なお、作品の一部は「かなべ図書館」にも展示された。



☆1999（平成11）年度 第7回 {2,638点}

会報第10号の「ポエムひろば」欄によると、第6回絵画展の作品は各地で展示された。新規では、「広島県庁ロビー展」「かもがた町屋公園交流展」「いばら町並展」がある。

☆2000（平成12）年度 第8回 {2,687点}

会報第11号「ポエムひろば」欄には、第7回絵画展を10会場で開催。新たに地元企業の「キングパーツ展」や「神辺文化会館展」「やかげ郷土美術館展」「ぬまくま町民ギャラリー展」「井原鉄道沿線ふれあい展」などの移動展が追加された。これが縁で、第8回展の出品校に岡山県（矢掛町省略も可）矢掛小学校・美川小学校名が仲間入りし、絵画展が交流の懸け橋になった。



☆2001（平成13）年度 第9回 {2,640点}

10月には、誠信幼稚園で開催された幼児教育研究大会に合わせて、同園併設の展示ホールで「誠信こども美術館展」が開かれ、第8回絵画展作品が展示され、中四国や全国各地から集まった200名以上の教師達を感動させた。

第9回記念館展には635点の入選作品を展示し、入場者は2,101人と過去最高。

ふくやま美術館にも1,375人と、多くの人を訪れている。

☆2002（平成14）年度 第10回 {2,732点}

10月、ポエム絵画展10周年記念「廉塾ポエム祭り」が、廉塾周辺の特設会場で開催され、「ポエム絵画回顧展」と銘打って、第9回展までの優秀作品70点が廉塾の土堀や七日市上集会所に展示された。また仮設ステージでは「茶山ポエムの歌」（作詞・作曲：中山善照 合唱・編曲：奥野純子）が初披露された。

会報第13号には、「菅茶山先生の漢詩を歌う」と題した奥野純子氏の寄稿文が掲載され、茶山詩を音楽にする創作活動が報告された。別に「茶山讃歌 茶山の星」（作詞：中山善照 作曲：高月啓充）も掲載されている。

併せて、会報15号で発表されたお馴染みの「わが茶山先生」（作詞：辻みのる＝武村充大 作曲：八丈けい）の歌も忘れてはならない。現在もなお、「菅茶山生誕祭」や「茶山墓参の集い」などで歌い継がれている。

☆2003（平成15）年度 第11回 {3,004点}

詩題は12首。出品点数は3,004点・入選作品632点（特別奨励賞4点を含む）だが、22の校・園からの出品と最多を記録した。内訳は幼稚園3園・小学校9校・中学校8校・高校2校で、特に中学校が多かった。

絵画展創始から10年間、実行委員会の代表を務め、絵画展発展の礎を築いた岩川千年氏が降板し、後任として鶴野謙二氏が引き継いだ。

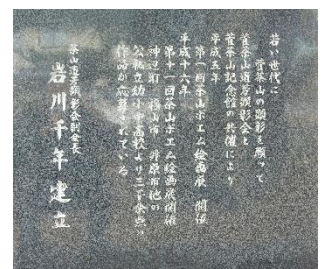
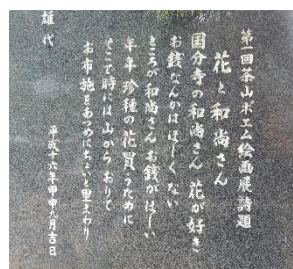


2004年3月、第11回絵画展優秀作品132点が「ふくやま美術館」で公開され、期間中1,000人を越える来場者があった。審査委員長の縄稚輝雄先生が来館され、「江戸時代の漢詩人が眺めた風物を、現在の子どもたちがここに再現しています。こんなすばらしい活動は日本中探しても他にはないのではないのでしょうか。」と見学者に語られた。

☆2004（平成16）年度 第12回 {3,188点}

備後国分寺門前に、茶山詩碑が岩川千年氏により建立された。

表面には「上人好事」原詩が、裏面上段には読み下し文・中段には茶山ポエム「花と和尚さん」・下段にはポエム絵画展創設と第11回実績が刻まれている。



☆2005（平成17）年度 第13回 {3,086点}



詩題は12首。出品校は15校園、出品点数は3,086点。記録によると入選作430点・佳作400点を選び、総入賞点数は830点とある。

審査はこの年から3年間、地元の日本画家 長谷川樹氏が縄稚氏の代行を務められた。

☆2006（平成18）年度 第14回 {3,098点}

神辺町・福山市合併（2006年3月）。

合併後初の第14回展からは、福山市教育委員会後援に代わったが、ふくやま美術館共催、深安地区医師会后援の体制は継続した。

初の市役所ロビー展（9月12日～29日）が開催され、第13回優秀作品50点が多くの来庁者の足を誘き留め、生涯郷土神辺に在って、儒学者・漢詩人・教育者・社会事業家として全国的にその名を馳せた菅茶山の存在を再認識させた。

☆2007（平成19）年度 第15回 {3,377点}

福山市かなべ文化振興会主催の「茶山ウイーク 茶山ポエム絵画展（10月）」、菅茶山顕彰会主催の「茶山祭 廉塾絵画展（11月）」が行われ、ポエム絵画が行事に華を添えた。

☆2008（平成20）年度 第16回 {3,317点}

廉塾にて「菅茶山生誕260年祭」が盛大に開催され、神辺文化会館では「茶山ウイークⅡ」が行われた。会場には第15回ポエム絵画が多数展示され、行事を盛り上げる一助となった。

☆2009（平成21）年度 第17回 {3,393点}

☆2010（平成22）年度 第18回 {3,104点}

詩題は12首。出品校16校園（内幼稚園3・小学校9・中学校3・高校1）、出品点数は3,104点、入選603点。絵画展表彰式の講評では、縄稚審査委員長が「作品は一人で描けるものではない。応援してくれた両親や先生などに感謝を忘れないで。」と受賞者に語りかけられた。



☆2011（平成23）年度 第19回 {3,068点}

☆2012（平成24）年度 第20回 {3,096点}



第20回記念菅茶山記念館絵画展のポスターには、「月を迎える」「晩秋スケッチ」を掲載。1月には「第20回茶山ポエム絵画展」の表彰式が行われ、顕彰会高橋孝一会長は「児童画の権威者 縄稚先生が審査されていることが誇り」とあいさつ。深安地区医師会 亀川睦雄会長は「絵は来院者への心の安らぎ」と祝辞。縄稚先生は「良い絵は頑張っている絵。絵と同じように他のことでも頑張してほしい。」と講評された。

（3）続く10年間の軌跡

☆2013（平成25）年度 第21回 {3,011点}

第20回まで続いた菅茶山顕彰会中心の実行委員会活動は終了し、第21回からは公益財団法人かなべ文化振興会菅茶山記念館が主催して行うことになり、顕彰会は共催団体として、絵画展のサポートと移動展の開催を担当することになった。また、ふくやま美術館との共催も終止符を打ち、「ふくやま美術館展」は終了した。

さらに、長年ご支援いただいた（財）渋谷育英会、（財）義倉様の助成金援助は終了した。

2013年12月には、「茶山ポエム絵画」代表団がポエム絵画22点を持参し、ミクロネシア連邦ポンペイ島を訪問。

国際絵画展に参加し、海外紹介という大きな節目を刻んだ。



☆2014（平成26）年度 第22回 {2,968点}

☆2015（平成27）年度 第23回 {3,230点}

詩題は10首。出品校は21校園で出品点数は3,230点と増加した。内訳は幼稚園3園15点・小学校8校2,611点・中学校10校468点で、入賞総数601点。

☆2016（平成28）年度 第24回 {2,977点}

本年度の詩題は10首。出品校は21校園で、出品点数は2,977点。入選600点。

絵画展スタートから23年間にわたって作品審査にご尽力いただいた縄稚輝雄氏が辞任され、今回から神辺美術協会（徳永侑子理事長）が引き継ぐことになった。

また、神辺創成の会は、茶山ポエムをイラストやカリグラフィー、歌曲などに創作した作品を募集する「茶山ポエム ART&MUSIC コンクール」を開催。（詳細は後述）

さらに、『まんが 福山の歴史神辺編』の発行などによって全国に発信し、多くの募集があった。

☆2017（平成29）年度 第25回 {3,000点}

詩題は10首。出品校は21校園で出品点数は3,000点。

18名の審査委員の目で、最優秀賞8点・優秀賞121点・入選478点（合計607点）が選ばれた。神辺美術協会徳永侑子理事長は「新しい詩も良く理解楽しく描いていた」と講評された。



☆2018（平成30）年度 第26回 {2,959点}

菅茶山生誕270年祭が行われ、式典会場の文化会館には、ポエム絵画展の入選作品の他、「茶山ポエム ART」受賞のアートや神辺美術協会メンバー作品のポエム絵画・墨書が展示され、茶山ポエムが「大人の茶山ポエム」でもあることを観る人に訴えた。

福山市にある広島県立歴史博物館では、館内の改修により「近世文化展示室」を新設し、館所蔵の重要文化財「菅茶山関係資料」を常設展示することになった。その関連行事として、2018年10月、同館ロビーに初めて優秀作品10点を展示した。



☆2019（令和元）年度 第27回

4月には、広島県立歴史博物館 開館30周年記念行事に協賛し、2018年度作品を10点同館ロビーに展示した。また、10月には、水野勝成神辺城入城400年記念行事に「町並み格子戸展」開催し、70点を町屋に展示した。

翌年1月の授賞式は、新型コロナ感染予防対策として規模を縮小したが、菅茶山記念館絵画展は例年どおり開催された。

☆2020（令和2）年度 第28回 {3,422点}

今年度中コロナ禍が猛威を振るい、町並格子戸展・市役所ロビー展・医院展などは中止を余儀なくされた。

2020年度絵画展への応募は、過去最高の3,422点に達したが、翌年1月の授賞式や記念館展はコロナ禍のため中止とした。

☆2021（令和3）年度 第29回 {3,224点}

昨年同様、町並み格子戸展や市役所ロビー展は中止したが、コロナ禍が小康状態になり、12月には、神辺支所エントランス展を新規開催した。



出品校は20校園で、展は応募20校園、応募者数3,224点。入賞作品数を600点から500点に変更した。コロナ禍自粛のため、授賞式は翌年1月に小規模実施し、記念館絵画展は3月に延期して開催した。

☆2022（令和4）年度 第30回 {3,223点}

かなべ図書館展を7～8月に新たに開催し、2021年度絵画16点ずつを2週間毎に入れ替え、4期に分けて（計64点）を展示した。

また、9月の市役所ロビー展を再開し、12月には、第2回支所エントランス展を開催した。

町並み格子戸展は10月に、神辺城下歴史まつりと共催して単日開催し、格子戸のある町屋と廉塾、神辺本陣に約60枚の絵画を展示した。

（4）30年間の総括

① 主催団体などの変更

絵画展実行団体の菅茶山顕彰会は絵画展創成の5年前に発足し、菅茶山記念館は1年前の開館であった。絵画展実行委員長を10年務め、絵画展の礎を創った岩川千年氏は元神辺町教育委員長であり、これらのことから、絵画展創成期は民間有志の熱意や実行力を神辺町教育委員会（行政）が強くバックアップしたに違いない。そうして、回を重ねるごとに民間団体らしい絵画展に成長し、20年が経過した。

会報第24号などを繙いて観ると、茶山ポエム絵画展は第21回（2013年度）を機に、「我々民間団体から、公的機関に委ねられることになり」と顕彰会元事務局長 渡辺慧明氏は、次のように整理している。

- ・ 冠の事業名称が「第＊回」でなく、当該「西暦年」表記に変更する。
- ・ 2014年度から、主催団体は（公益財団法人）福山市かなべ文化振興会・菅茶山記念館に引き継がれ、菅茶山顕彰会は共催団体に、神辺美術協会・福山市教育委員会は後援となった。
- ・ この事業に、初回から毎回多額の資金援助をしていただいた（財）渋谷育英会と（財）義倉などがコンプライアンスの関係から後援団体から退かれた。

② 作品内容と展示会など

2014年度募集要項には詩題に現代語訳者が明記されている。パイオニアの中山善照氏は別格として、岩川千年や矢田翠、武村充大、本安俊三諸氏らはいずれもOBや現職教育関係者が名を連ねている。今後、新しい「茶山ポエム」が創作され、絵画展に採用されることが期待される。

創成期から続いた「ふくやま美術館」との共催関係は、惜しくも第20回をもって終了した。初回は美術館廊下に20点の展示から始まり、毎回130点を展示するイベントとして続いたが、次第に、美術館ならではの高い天井際から目線で、専用の高

い足場を使って作品掲示する作業は高齢化する会員ならずとも敬遠気味となった。

③ タフな作品審査

初回から2015年までの22年間、児童絵画の審査で定評のあった縄稚輝雄氏に審査を担当してもらった。会報第13号には、同氏が10年間を振り返って、「作品の多様で創造性豊かな努力作には、いつも驚きと喜びとで、わが事のように大変うれしく感動している」と書かれている。

中途、長谷川樹氏が担当されたことが記録に残されている。

「長谷川樹作品集」（2009年）によれば、2004年第12回ポエム絵画展審査員（以後3回）の記述がある。会報第16号には、13回展について「審査雑感」が寄せられている。平成20年 享年67歳で帰らぬ人となった。

ともあれ、縄地先生には長期間に亘って、毎年午前9時から昼過ぎまで、短時間のコーヒータイムを除いて、ほぼ中腰状態で、一枚一枚の作品を公平公正かつ丁寧に繰り返し繰り返しタフな審査に、傍で理事達は補助員としてお手伝いをしながら、頭が下がる思いがしていた。菅茶山顕彰会が2022年度「広島県教育奨励賞」表彰の栄誉に輝いた淵源の恩人である。

縄地先生経営の誠信保育所・幼稚園はご子息縄稚誠基氏に引き継がれ、今もなお途絶えることなく多くの作品が絵画展に寄せられている。生前中、二度に亘って、文部科学大臣受賞の栄誉に輝いた縄地輝雄氏は2020年93歳で逝去。

2022年6月～8月、渋谷美術館にて「遺作展」が開催された。

2016年、縄地先生に代って神辺美術協会に依頼し、当時の徳永侑子理事長が審査委員長を2年間担当されたが、2018年には神辺美術協会理事長異動に伴い、審査委員長は石岡洋三氏に交代し、現在に至っている。

2018年から、審査会場をかなべ文化会館小ホールに変更したため、審査員十数名がフロア一面に、学年グループ別に並べられた作品をコマネズミのように動き回るなどして、それも半日かけて審査を完了した。



段取り八分、それを裏方として支え続けたのが、菅茶山記念館職員である。スタッフのご苦労は審査だけに留まらず、募集から作品の返却まで、一連の業務が一年周期で繰り返される。こうした縁の下の力持ちによって歴史が繰り返されている。

④ 茶山ポエムの広がり

2018年3月の「梅花の契り」（茶山生誕270年記念朗読劇）上演に伴い、前年度の最優秀・優秀作品を同会場「かなべ文化会館」ホワイエに展示した。

その際、新しい機軸として、神辺美術協会新春展に出品の「夏の思い出」

（山下英一画）、「所見」「蝶」（菅波由美子書）を同時公開し、成人向け菅茶山詩画・書として注目を集めた。

会報21号によると、2010年には、東京銀座の画廊に茶山ポエム「月



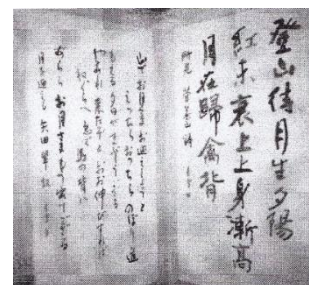
<夏の思い出>



<所見・蝶>

を迎える：所見）「天の川（雨後）の書が展示されて話題となった。作者は元神辺町長 高垣 久氏の長女で、町書芸家 中江星雪氏（旧姓：高垣政子）。

茶山詩を原詩で味わえる人が希少となった昨今、茶山詩を意訳した歌曲「ふるさと中条」や【茶山ポエムART&MUSICコンクール】が目指した、茶山漢詩をキーとした詩・絵画・音楽などの創作が世代を超えて広まることを大いに期待したい。



⑤ コロナ禍中の関連行事

2020（令和2）年、全世界を襲ったコロナ禍のため、年初の「2019年度絵画展」は授賞式・絵画展はできたが、展示会はすべて中止となった。

「2020年度絵画展」は保・幼・小・中・高から過去最高の3,422点の応募があったが、翌年の授賞式・展示会は中止、若しくは縮小のやむなき事態に追い込まれ、受賞者にとっては残念な年となった。

2021年、3,224点の応募作品があったが、昨年続くコロナ感染自粛のため、翌年1月に開催した「2020年度絵画展」の受賞式への出席者は、来賓と最優秀賞受賞者などに限定され、記念館展示会も3月18日から4月3日まで延期・開催された。しかし、町並み格子戸展（春季・秋季）、福山市役所ロビー展は中止された。

一方、「展示発表なくして、前進なし」と、長期化する「with コロナ」生活との観点から、和戦両用の備え、3密感染拡大予防対策を厳に講じながらも、展示会の復活と新規移動展の開発に努力している。2021年12月以降、「神辺支所エントランス展」や「かなべ図書館展」などの新規展も開催している。

⑥ 広島県教育奨励賞受賞&ITスキルによるSDGs

節目の30周年を迎えた2022年2月、前述のとおり、顕彰会は広島県教育委員会から「広島県教育奨励賞（地方文化）」を受賞した。表彰理由の一つに、「茶山ポエム絵画展」がピックアップされていることは言を俟たない。これを励みに、更なる高みを目指して、「茶山ポエム」「ポエム絵画」の普及、絵画展・移動展のレベルアップなど諸活動の一層の活性化が望まれる。

その一つに、顕彰会が2001年8月に開設したホームページの活用がある。

現在は「菅茶山新報 <https://www.chazan.click>」としてオンエアされ、本会の顕彰活動や地元の文化活動などをマンスリーに掲載するほか、茶山ポエムなど菅茶山関連の紹介・記録・資料を収録している。

過去のポエム絵画展や受賞作品などを調べるツールとして利用できるが、さらなるskill upと易しくて楽しい掲載内容への工夫が求められる。

スマホからもアプローチが可能。何よりも多くの「イイネ！」サーファーの訪問を期待したい。